

応神天皇 恵我藻伏岡陵飛地に号排水路その他整備工事に伴う事前調査

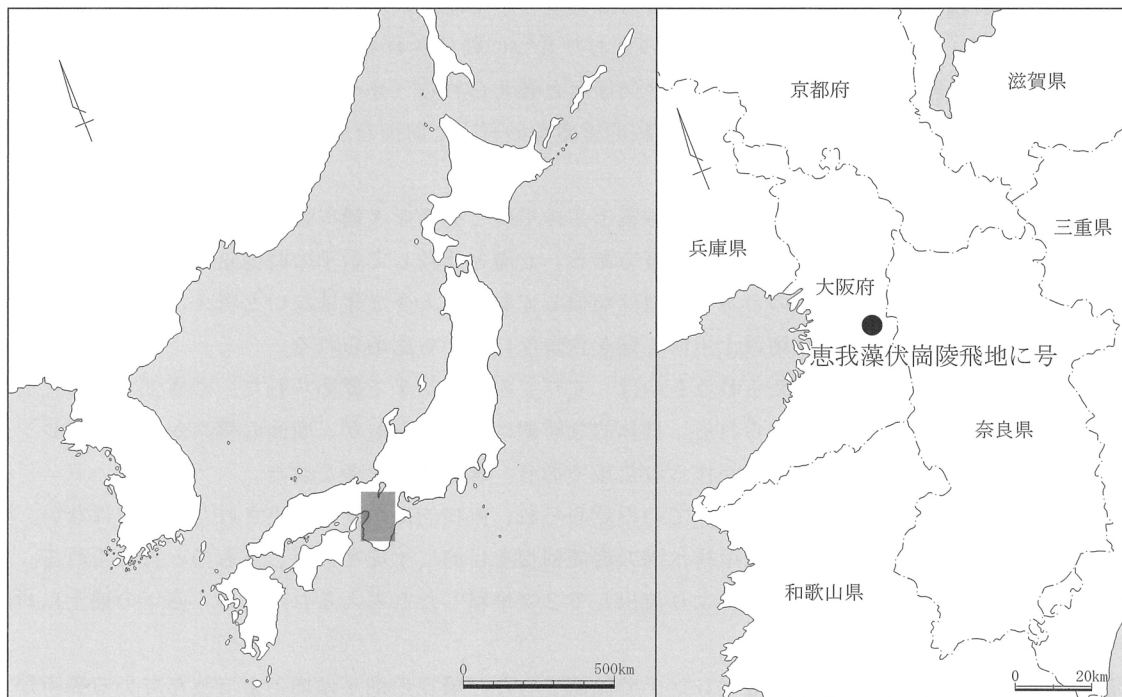
はじめに

本飛地は、大阪府羽曳野市白鳥3丁目に所在し、羽曳野市役所南側に隣接する位置にあたる。一辺約60mを測る大形の方墳であり、遺跡名は向墓山古墳である。応神天皇陵からは南西約0.6kmの位置にあり、古市古墳群の中核地域にあるといえよう（第21・22図）。

周辺の環境 本飛地は、中位段丘上の縁辺部から低位段丘へ移行する斜面上に位置しており、南～東にかけては低位段丘面が削られた開析谷が形成されている。西側には、同じく中位段丘縁辺部に築造されている応神天皇陵飛地ほ号（墓山古墳、全長約230m）があり、後述するとおり羽曳野市教育委員会による調査で外堤を共有することが判明している。本飛地は飛地ほ号の陪冢的位置にあるといえる。飛地ほ号の周辺には、そのほか浄元寺山古墳、西墓山古墳、野中古墳が点在している。また、開析谷を挟んで南東に同じく応神天皇陵飛地ほ号（西馬塚古墳）があり、この谷の斜面には誉田白鳥埴輪窯跡群も確認されている。

調査に至る経緯 現在、本飛地の東面と南面は住宅地に接している。先述のとおり、この範囲は開析谷に沿っており、地形的には本飛地からは高さを減じる位置関係にある。そのため、一定量以上の降雨の際、墳丘を経由して流出する水が境界線沿いにある排水口のない開渠溝にたまり、しばしば溝からあふれる状況が生じていた。また、流水に伴って墳丘裾の崖状部分の崩落の虞もあったことから、境界線沿いの安全性を高めて、このような状況を改善するための工事が計画された。このような経緯から、事前に遺構の残存状況、墳丘の構造等を確認して、工法決定に資するデータの収集を主たる目的とする調査を実施することとなった。

調査は、平成24年1月17日～24日の間、古市陵墓監区事務所の協力を得ながら実施した。調査にあたっては、羽曳野市教育委員会の諸氏には多大なご協力をいただいたほか、周辺の遺跡調査に関する所見等についてもご教示いただいた。記して感謝申し上げたい。



第21図 恵我藻伏岡陵飛地に号 概略位置図（1/25,000,000、1/2,000,000）

1 既往の調査

宮内庁による調査 平成 18 年に墳丘北面の裾に沿って外構柵改修工事が実施されることになり、工事区域となった東西約 47 m に渡って調査を実施している。その結果、一部に葺石の可能性がある大形の石を認めたが、検出範囲が狭いために残存する葺石面であるか否かは不明である。遺物は埴輪片のほか、土器が多く出土している⁽¹⁾。

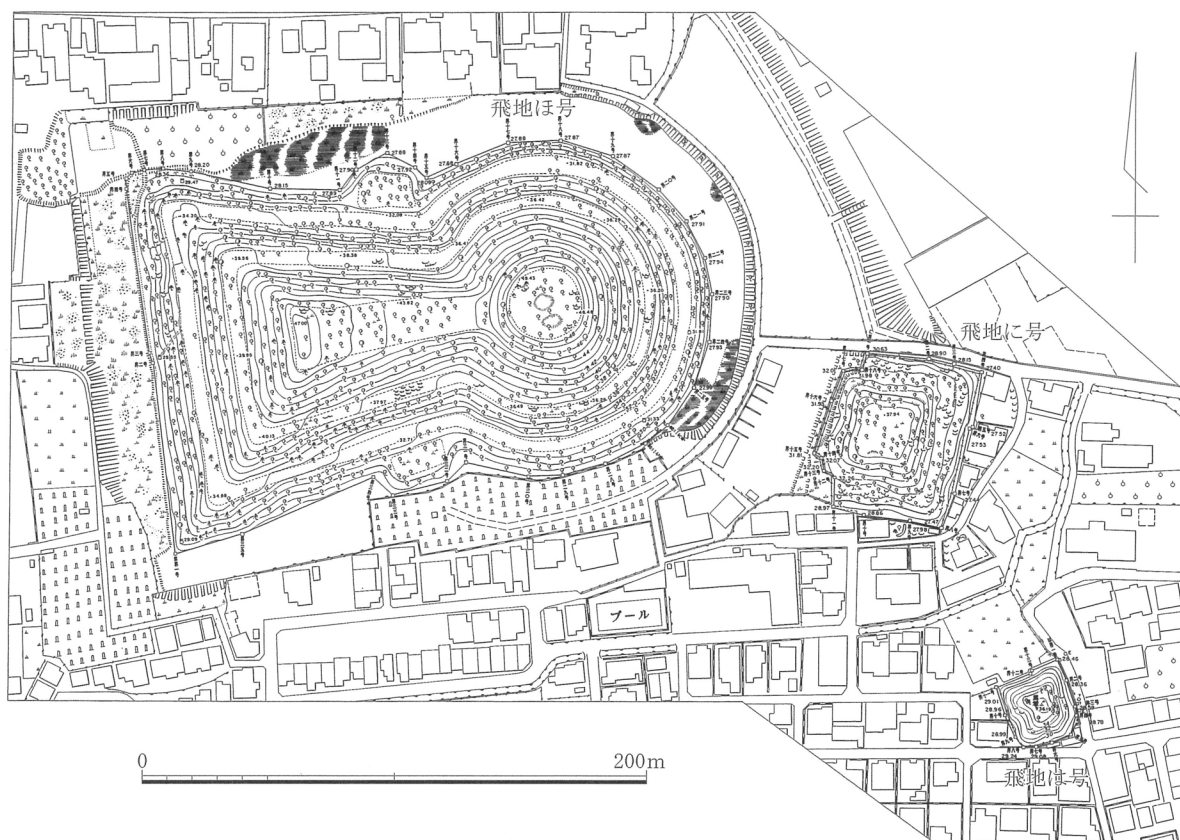
羽曳野市による調査 平成元年に、墳丘西面から北面に接した範囲で調査が行われて、墳丘裾部の様相、飛地ほ号（墓山古墳）との関係性が遺構のうえから明らかになった。墳丘裾では葺石が広い範囲で確認されている。基底部には根石列が形成されており、径 20 ～ 60 cm の大形の石が用いられ、その上に施された葺石は径 5 ～ 10 cm のものを中心とする。また、西面と北面のそれぞれに 1 箇所ずつ渡土堤が確認されて、西面の渡土堤は飛地ほ号の外堤と接続しており、計画的に築造されていたことが判明した。遺物は円筒埴輪や形象埴輪片を中心に、本来的に伴ったものではない可能性の考えられる土器等も出土しており、埴輪は有黒斑のもので占められる⁽²⁾。

2 トレンチの設定と基本的な層序

本飛地の調査にあたっては、施工範囲となる墳丘東側と南側の裾部を中心に 6 箇所のトレンチを設定した。北東隅を第 1 トレンチとして時計回りに順にトレンチ番号を付した。トレンチの規模は長さ 2 m × 幅 1 ～ 2 m を基本としたが、現地の状況で異なっている。墳丘中軸となる第 3 ・ 6 トレンチについては長めに設定して、第 1 段平坦面の確認を中心に、本飛地の構造を把握できるようにした（第 23 図）⁽³⁾。

調査で確認した基本的な層序は以下のとおりである。

- I 層 表土。黒褐色腐植土。すべてのトレンチで認められる。
- II 層 既設工事の埋戻し土。暗黄褐色と黒褐色粘質土を主体とする。平成 19 年度実施の外構柵設置工事範囲に近い第 1 トレンチでのみ認められる。
- III 層 後世の盛土。すべてのトレンチで確認された。第 3 ・ 4 ・ 6 トレンチでは 3 ～ 5 層に細分される。しかし、堆積状況から、盛土が一定の時間経過の中で流出した 2 次堆積と考えられるものなども含んでいる。そのため、特徴から以下のとおり 5 つに細分されるものの（a ～ e 層）、墳丘への直接的な盛土の回数としては、多くても 3 回ほどと考えられる（a ～ c 層）。
 - a 層 第 3 ・ 6 トレンチで確認された。比較的堅緻な砂質土で斜面を広く覆う。礫と遺物を多く含むが、第 3 トレンチはやや少ない。
 - b 層 第 3 ～ 5 トレンチで確認された。砂質土主体で礫と遺物を大量に含む。特に第 3 トレンチは、ほぼ礫層といえるほど礫の含有が顕著である。c 層と比較して若干の時間差をおいて形成されているようであるが、後述のとおり特徴は類似しており、大きな差はないと考えられる。また、例外的に第 4 トレンチでは粘質土主体で礫を含まないものも認められる。
 - c 層 この層に該当すると考えられるものは、すべてのトレンチで認められた。砂質土で、墳丘面に対しての最初の盛土と考えられる。具体的な時期は不明であるが、断面の観察から第 4 トレンチで確認した裾部の暗渠排水溝が作られた後である。礫と遺物を多く含む。
 - d 層 第 4 トレンチの墳丘裾部においてのみ認められ、直接的に墳丘に盛土されたものではない。盛土の中ではもっとも古く、暗渠排水溝の機能回復を目的に土堤を形成したものと考えられる。
 - e 層 盛土の後、降雨などの影響により流出して 2 次堆積したと考えられるもの。直下の盛土に対応すると考えられる。
- IV 層 墳丘削平後の流土。第 2 ・ 5 トレンチで確認された。墳丘の削平は地山まで及んでいる箇所が多いが、III 層が形成されるまでの間に、いったんむき出しになった地山面が降雨などの影響により流出して堆積したと考えられる土層である。



第22図 恵我藻伏岡陵飛地に号 位置図 (1/3,000)

- V層 遺構面を直接覆う堆積土。第1・4・6トレンチで確認された。葺石やテラス面を覆っている築造後最初の堆積土である。
- VI層 墳丘盛土。第3・6トレンチで確認されている。周辺の基盤層である段丘砂礫層を起源と考えられる (VI b)。礫を大量に含んでいるため、テラス面は化粧土 (VI a) により整地されたと考えられる。
- VII層 地山。黄褐色～灰褐色を呈する粘質土の場所と、赤褐色を呈する砂質土の場所がある。いずれも堅緻な土層である。

3 各トレンチの状況

第1トレンチ (第24図1、図版14-1) 墳丘北東隅に長さ1.6m×幅1mの規模で設定した。

表土 (I) の下に周辺の外構柵設置工事による埋戻し土が認められる (II)。その下には比較的厚く盛土 (III c) が堆積する。北壁を見るとわかるように、標高26.9m付近から検出された葺石面が大きく削られた後の堆積である。葺石の直上には礫を含む築造後最初の堆積土がみられる (V)。

トレンチの西壁から約0.5mの範囲に葺石の点状斜面向上が検出された。検出範囲が狭いため、本来の墳丘面か否かの判断は難しいところである。傾斜角は約17度でやや緩やかな角度といえよう。墳丘面をとどめているにしても石はまばらであるため、少なからず動いているものと推測される。使用されている石は、径5～10cmを測る。

遺物は、埴輪・土師器を中心に須恵器・瓦・瓦質土器等が出土した。

第2トレンチ (第24図2、図版14-2) 墳丘東面の裾部、第1トレンチから南約16mの位置に、長さ2m×幅1mの規模で設定した。土層は、表土 (I) の下に大量の礫を含む盛土 (III c) が堆積する。この層は遺物の包含量も多い。その下は2つに分けられる地山の流土 (IV) が、III c 層の半分程度の厚さで堆積している。IV層を掘り下げると、床面すべてで暗黄褐色粘質土である地山 (VII) が検出された。床面は緩

やかな傾斜面となっており、葺石はおろか墳丘盛土も完全に削られていると考えられる。

遺物は、土師器の破片が多くを占めて、少量の埴輪片・須恵器片が出土した。

第3トレンチ（第24図3、図版14-3・4） 墳丘の東西方向における中軸線上に、長さ8.7m×幅1mの規模で設定した。表土（Ⅰ）の下に盛土（Ⅲa）が堆積する。盛土は堅緻で含まれる礫の量は少ない。この層から出土した遺物は少なく、図中に示したトレンチ西端付近の破線付近より上のレベルで出土したが、それより下位では出土が見られなかった。標高30.3m付近で主に粗砂と礫を主体とする土層が検出されたが、後述する第6トレンチの所見をもとにすると、墳丘盛土（Ⅵb）である可能性が高い。墳丘測量図からはトレンチ内でテラス面が確認される可能性を考えたが、第6トレンチ検出のテラス面との関係から考えると、第3トレンチ付近のテラス面は既に削られてしまっていると考えられる。Ⅲa層は次第に厚みを減じて、トレンチ東端付近で収束する。かわって礫と遺物を大量に包含する、ほぼ礫層といってもよいほどの盛土（Ⅲb）が堆積している。厚さは0.6mほどで、小形の礫が主体を占める上層と大形の礫が主体を占める下層に分けられるが、それ以外に大きな違いはない。Ⅲb層の下には、黒褐色粘質土の盛土（Ⅲc）が新たに現れる。大形の礫が認められるものの、Ⅲb下層に比べると礫の割合は低くなっている。Ⅲb層との近い特徴が認められる一方で、土質、土色ともにまったく異なる。このⅢc層上面では、遺物が検出時点では面的に集中するように見える箇所があった。しかし、結果的に埴輪や奈良時代と考えられる土器など異なる時代の遺物が混在している状況であることが判明したため、何かしらの遺構面と考えるよりは盛土の中に様々な遺物が混入した状況と考えるのが妥当であろう。遺物はⅢc層内全体に含まれている。Ⅲc層を取り去ると、堅緻な淡黄褐色砂質土が検出された（Ⅵb）。葺石等も確認できないため、墳丘面が既に削られてしまっている状態と判断される。地山の可能性も考えられるが、他のトレンチで確認されている地山と共通点が少ないため、ここでは墳丘盛土と考えておく。Ⅲb層、Ⅲc層はいったん墳丘面が削られた後に2次堆積で形成された土層ということになろう。

遺物は、Ⅲb層を中心に遺物が多く出土している。土師器の割合が高いが埴輪も少なからず含まれる。また、Ⅲb層では少量ながら磁器や瓦片を含んでおり、近世以降に形成されたことを示唆する。

第4トレンチ（第24図4、図版14-5・6） 墳丘東面の裾部、第3トレンチの南約17mの位置に、長さ2.6m×幅1mの規模で設定した。

表土（Ⅰ）の下に2層の盛土（Ⅲb・Ⅲe）が認められ、上層は粘質土で礫を含まない特徴がある。高杯の破片が出土している。下層は厚く堆積しており、礫と遺物を多く含む。さらに下には、もう1層の盛土（Ⅲc）が確認された。特徴はⅢb層と大きくは変わらないが、間に流土と考えられるⅢe層を挟んでおり、若干の時期差を見込む必要がある。この盛土の下に、薄く葺石面を直接覆う土層（Ⅴ）があり、葺石面をもつ墳丘斜面に至る。

ところで、本トレンチでは本飛地に改変が加わった状況の一部が判明しているので、少し述べておきたい。Ⅰ～Ⅲe層の堆積が現在の墳丘斜面部を形作ったといえるが、その前段階として墳丘裾に改変の加わっていることが判明した。具体的には、墳丘裾に沿って溝が作られたことである。北壁の土層断面をもとに述べると、まず地山を浅く掘りくぼめて礫を充填している（堆積土②）。充填された礫の中には埴輪片も確認されていることから、本来葺石として使用されていた礫が再利用されたと考えられる。その後、この溝は機能が低下したと考えられるが掘り直しなどはなされず、東側に土堤状の盛土（Ⅲd）を行うことで結果的に新たな溝を形成している。この溝も次第に埋没していったと考えられ（堆積土①）、盛土（Ⅲb・Ⅲc）が行われたことにより廃絶している。最初の溝に葺石に使用されたと考えられる礫が使われていることから、溝の掘削にあたって、裾部を中心に改変の加えられたことが推測される。

本飛地の遺構としては、葺石を確認した。径5～10cm程度のものが主体となっており、葺石面は凹凸が顕著である。また、石の間には小さな埴輪片などが少なからず入り込んでいる状況が認められた。傾斜角度は約28度である。

なお、溝の掘り込まれた位置で地山が墳丘斜面に対して平坦に検出されているため、この傾斜変換地点が

ほぼ墳丘東側の裾と考えられるが、羽曳野市教育委員会の調査で検出された基底石列は確認されていない。

遺物は、土師器片を中心に、埴輪片・須恵器片が出土した。

第5トレンチ（第24図5、図版15-1・2） 墳丘南東隅に長さ2m×幅2mの規模で設定した。最終的に北壁と西壁を裾側に長さ0.6m、幅0.5～0.6mの規模で拡張し、北壁については地山まで断ち割りを行った。

表土（Ⅰ）の下に、盛土（Ⅲb・Ⅲc）が堆積する。Ⅲb層は礫と遺物が多く含まれている。Ⅲc層の下に、やや傾斜のある平坦面を検出した。この面では、北西隅に集中的に礫が認められたほか、東壁に沿って幅0.5mほどの礫面を検出して、当初は第4トレンチで確認した礫を充填した溝の続きかとも考えられた。しかし、この礫面も含めて北壁沿いで断ち割りを行った結果、礫面の幅に対応する範囲で傾斜角が約25度を測り、検出面のレベルも第4トレンチの葺石面と同じであることが判明した。よって、この範囲で見られる礫は葺石と考えられ、多少は動いているように見受けられるものの、削平を免れて残存していると考えられる。地山面（Ⅶ）は、北壁東端床面で確認された。直上に流土（Ⅳ）の堆積がみられる。東に下る斜面として検出され、平坦面に移行している。確認した礫は、この地山面に載っている。

なお、葺石の残存面と平坦な地山面の存在から、本トレンチ北壁東端付近に本飛地の墳丘裾が位置していた可能性が高い。

遺物は、Ⅲb層を中心に土師器片・埴輪片・須恵器片・瓦片が出土した。遺物の量は第2～4トレンチと比較するとかなり少なくなっている。

第6トレンチ（第25図6、図版2、15-3・4） 墳丘の南北方向の中軸線上に、長さ9.4m×幅1mの規模で設定した。

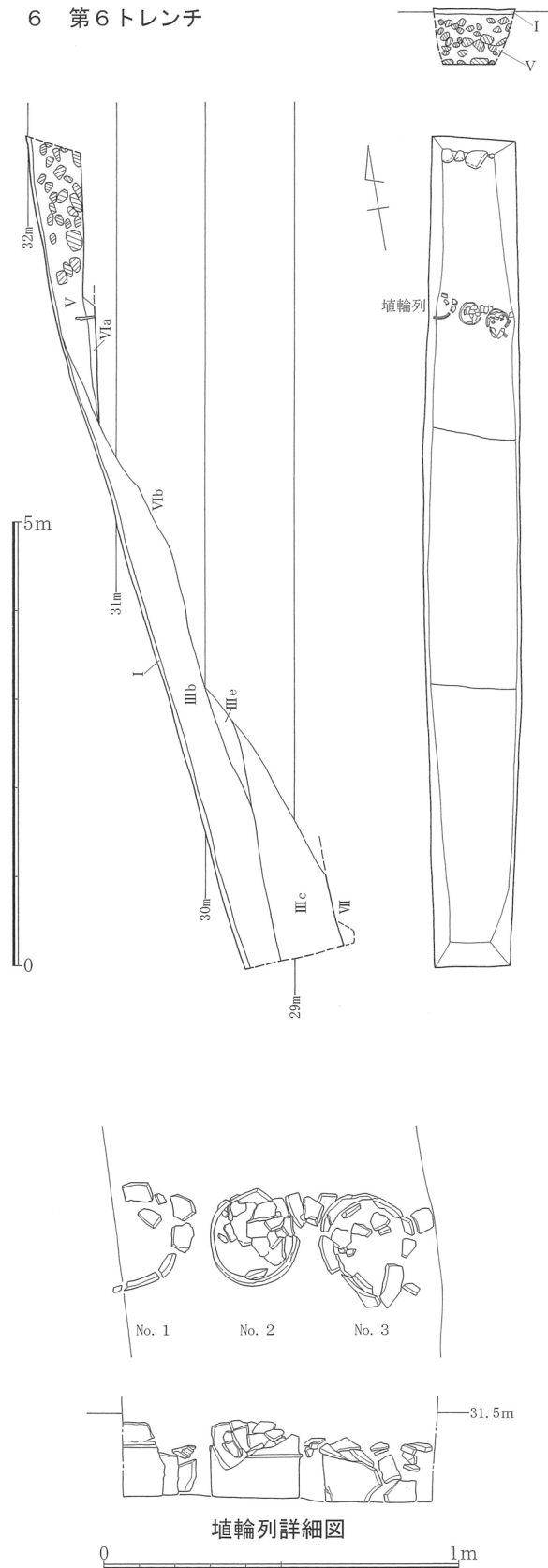
表土（Ⅰ）の下に、盛土が確認された（Ⅲb・Ⅲc）。Ⅲb層は検出範囲が広く、平面的にはトレンチ南端から北へ約7mの範囲、立面的には標高31.6mまで確認された。礫と遺物を多く含む砂質土である。この土層を掘り上げると、広く墳丘盛土（Ⅵb）が検出された。葺石はまったく検出されなかった。その下にⅢe層を挟み、Ⅲc層が約0.7mの厚さで堆積する。礫と遺物を多く含む砂質土であり、含まれる礫の大きさはⅤ層に含まれるものと同じく、径10～20cmの比較的大形のものが目立つ。Ⅲc層の堆積箇所は、土層断面を見る限り、かなり意図的に深く削り取られており、その跡を埋めるような盛土になっている。それを掘りあげると、トレンチ南端付近で地山面（Ⅶ）を検出した。

ここでトレンチ北側に目を向けると、表土（Ⅰ）の下に、すぐに遺構面を直接覆う流土（Ⅴ）が場所によっては約0.6mの厚さで確認された。この流土には、墳丘上方から転落してきたと考えられる葺石が大量に詰まっている。また、その大きさは径10～20cmの比較的大形のものが占められており、他のトレンチで見られた葺石の石材とはやや様相が異なっている。

遺構としては、標高31.4mでテラス面と埴輪列、および葺石の基底石の一部と考えられる石列を検出した。上記Ⅴ層は、このテラス面と埴輪列を覆っている。テラス面の南端は既に削られているため、現存しない。また、第2段斜面葺石の基底石と考えられる大形の石がトレンチ北端で一部確認されている。これが基底石列であれば、現存のテラス幅は約3mである。埴輪列は幅1mのトレンチ内で3個体が確認された。転落した葺石は、この埴輪列で転落が止まった様な状況を示している。テラス面は、Ⅵb層によりいったん平坦面を形成した後、化粧土と考えられる堅緻な砂質土（Ⅵa）により整地される。埴輪列は、掘り下げの過程では掘方をもつと考えられたが、土層の特徴が周辺とよく似ており、明確に掘方埋土として区別できなかった。また、埴輪接地面がⅥb層上面と一致し、その上に整地層が重なることから、掘方をもたず、整地層によって埴輪を樹立、固定している可能性も考慮しておく必要がある。

遺物は、埴輪列が検出されたことにより埴輪片が多くを占める。第1段斜面が削られた後に堆積したⅢb層には、陶器・磁器・瓦片が含まれており、第3トレンチのⅢb層と同じ様相を示している。本トレンチのⅢb層は、第3トレンチを中心に墳丘西辺に設定したトレンチと同じ性格と考えられるが、色調や土師器片の含まれる量などに歴然とした差がある。

6 第6トレンチ

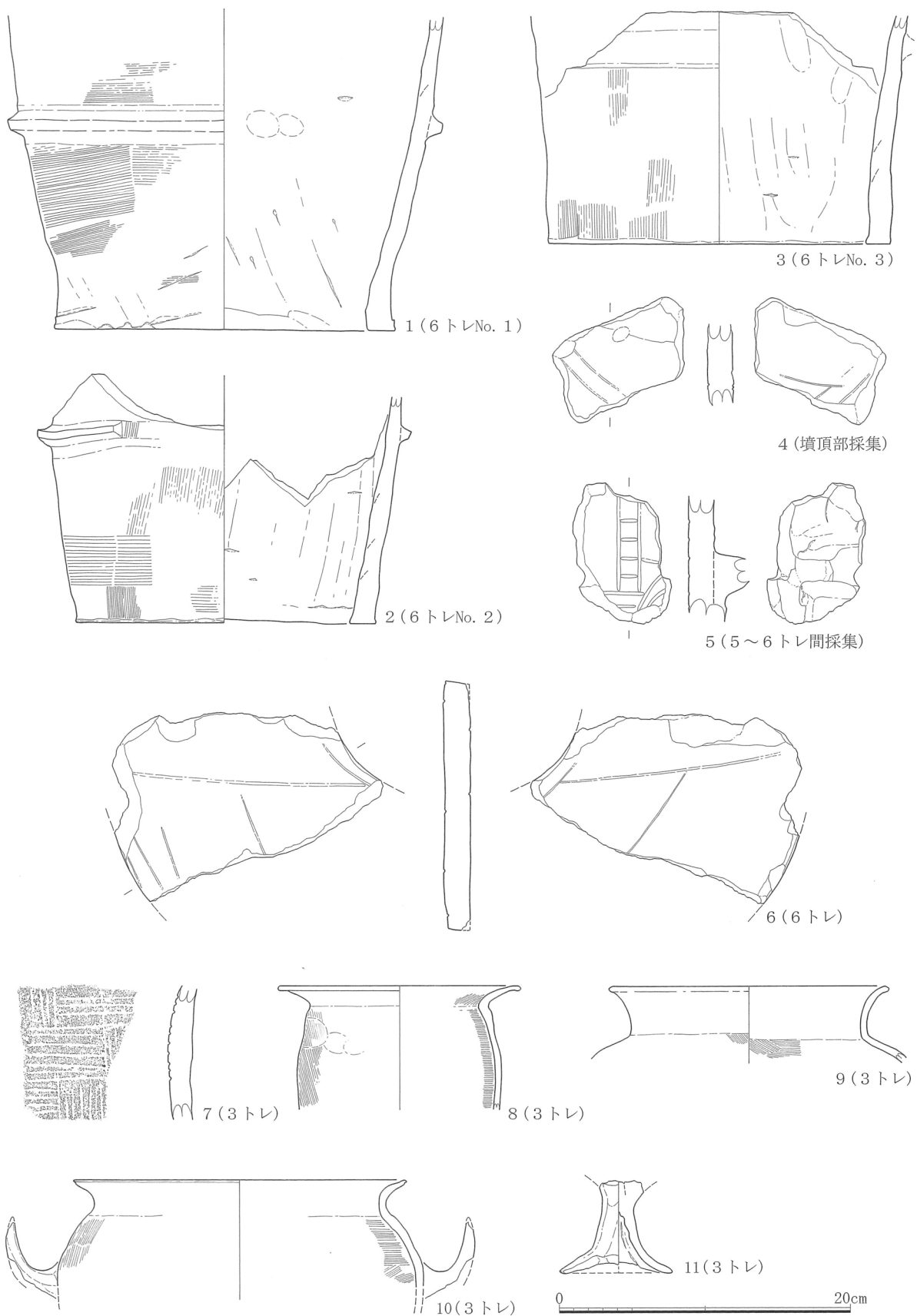


第25図 恵我藻伏岡陵飛地に号
トレンチ平面図及び断面図(2) (1/80、1/20)

4 遺物

本飛地の各トレンチからは、埴輪片を中心に1995点の遺物が出土した。埴輪片のほか土師器片が多いのも特徴であり、そのほかにごく少量の須恵器、陶器、磁器、瓦の破片等を含む。特に土師器片は第2～4トレンチで多くみられる。遺物の傾向からは様々な遺物を含む盛土が、墳丘東辺に沿って分布することを読み取れるほか、土師器片等の量は少ないものの、第6トレンチの位置する南辺についても大きく改変されていることは、既に述べたとおりである。以下、主要な遺物について述べることとする(第26図、図版15-5～8)。

1～3は第6トレンチで埴輪列を形成していた埴輪である。第1段～2段にかけてが残存している。1は、やや上方に開きながら立ち上がり、もっとも高く第2段の途中まで約22cmが残存する。底径約23cm、第1段突帯下端までの高さは約13cmを測る。突帯の高さが約1cmで幅も最大約1.5cmであり、細身の突帯である。調整は、摩滅で不明瞭だが、外面は1次調整が板ナデで、2次調整がヨコハケである。1次調整の板ナデは底部付近に工具の圧痕が複数確認できるが、タテハケは残っていない。内面は、ハケメが認められず、縦方向のナデである。砂粒を明瞭に引きずった痕跡、単位が条痕として確認できる箇所があることから、外面の1次調整と同様に板ナデによるものと考えられる。また、内面底部においては、端部沿ってやや不明瞭ながらケズリが施されているようである。2は、やや上方に開きながら立ち上がり、高さは約17cmが残存する。底径約21cm、第1段突帯下端までの高さは約12cmを測る。突帯は1と同様の大きさであり、細身である。調整は、外面が1次調整がタテハケで、2次調整がヨコハケである。摩滅でやや不明瞭であるが、ヨコハケの施される範囲はそれほど広くはないようである。内面は縦方向の指ナデである。その他の特徴として、底部外面の一部に黒斑が認められる点を挙げられる。3は、わずかに上方に開きながら立ち上がり、高さは約16cmが残存する。底径は約23cmを測る。突帯は剥離しているが、その痕跡から底部からの高さは約13cm程度と推測される。また、剥離面の幅などから形態や大きさは1・2と同様と考えられる。調整は、



第26図 恵我藻伏崗陵飛地に号 出土品実測図 円筒埴輪・形象埴輪ほか (1/4)

外面がタテハケである。摩滅で不明瞭な部分が多いが、ヨコハケは認められないようである。内面は縦方向の指ナデである。

1～3とも、全体の大きさや段構成は不明ながら、底径が約21～23cmを測り、底面から第1段突帯下端までの高さが約12～13cmを測るなど、数値がまとまることから、ほぼ同じ大きさの埴輪であったことがわかる。また、突帯の高さが1cm未満で、接合部での幅も1～1.5cmであり、細い突帯であることや、底部がきれいな円形とならずに歪みがみられるほか、底面が平滑で板の上で製作されたことを推測させることなどが、共通する特徴として挙げられよう。しかし、調整は形態や大きさと比較して、基本的な傾向は同じであるものの、個体ごとに特徴が見られる。

4～7は形象埴輪である。明確に本飛地に帰属すると確定できる出土状況にあるものはない。4は、墳頂部北辺で採集された蓋形埴輪の立飾りの破片である。摩滅が著しいが線刻による文様の一部をわずかに確認できる。墳頂部には改変が及んでいないと考えられるため、本飛地に帰属する可能性がもっとも高いといえるが、確定はできない。5は、第5トレンチと第6トレンチの中間付近の墳丘斜面で採集された鞍形埴輪の破片である。表側には線刻により梯子状の文様などが描かれている。線刻の幅は約2mmを測る。裏側には補強用の粘土が認められる。第5トレンチと第6トレンチ間の現墳丘面はⅢ層で形成されている可能性が高く、本飛地に帰属するかどうかは不明と言わざるを得ない。6は、第6トレンチのⅢb層から出土した蓋形埴輪の立飾りの破片である。両端部が残存しており、残存部幅は約17cmを測る。比較的細い線刻による文様が施されている。7は、第3トレンチのⅢb層から出土した家形埴輪の屋根の破片である。線刻により網代が表現されている。8以降の土師器とともに出土しており、他の形象埴輪と同様に、本飛地に帰属するかどうかは不明である。

なお、他にも埴輪の破片は多く出土しているが、図化していないものの中には、タテハケのみで調整されたものなどがある。特に、第3トレンチのⅢb層での出土品を中心に、明らかに第6トレンチで見られる埴輪の特徴とは異なるものが含まれている。

8～11は土師器である。いずれも第3トレンチのⅢb層からの出土である。8は、長胴甕の破片と考えられる。器壁は薄く、内外面に細かいハケメが施されている。9はやや肩の張る甕の破片である。内外面に細かいハケメが施されている。10も甕の破片である。内外面の調整は、8・9と同じである。11は高杯脚部の破片である。高杯は、過去の調査においても一定量の出土がみられる。全形は不明であるものの、本飛地に帰属する可能性を考えられる資料といえようか。これらの土師器は、特に第3トレンチで集中的に出土したが、奈良時代など明らかに本飛地の築造時期から後出する資料が多く見られることが特徴といえる。しかし、埴輪片と混在するなど、後世の祭祀のような、有意な出土状況は示さない。

5 飛地に号に関する所見

規模と構造 本調査の結果、墳丘裾部は既に破壊されている箇所が多いことが推測される。しかし、規模を知る上で、第4・5トレンチの調査結果が参考となる。

第4トレンチでは墳丘第1段斜面の裾部付近と考えられる葦石が検出された。裾部は後世の溝により破壊されていたため、羽曳野市教育委員会の調査で確認されているような葦石の基底石列があったとしても破壊されている可能性が高い。そのため、溝付近が確実に墳丘裾であると断定はできない。しかし、溝の掘り込まれた地山面を見ると、東に向かって少なくとも傾斜が平坦へと変化しており、斜面のまま東に向かって下る地形とはなっていない。また、葦石の残り具合は悪いものの第5トレンチにおいても同様の所見を得ている。このことから、ほぼ溝の位置が墳丘東側の裾と考えてよいと思われる。

よって、既に羽曳野市教育委員会による調査で確定している西側裾部を起点に測ると、東西の規模は約61mという数値が得られる。方墳であることから、南北も極端に規模が異なることはないであろう。

また、構造に関しては、標高31.4mの高さにテラス面が確認され、測量図から読み取れていたとおり、テラス面の存在は確実である。他にテラス面の存在を考えさせる兆候は、現地形、トレンチ内においては認

められなかったため、本飛地の墳丘は2段築成と考えられる。ただし、東面と南面の地形が大きく下ることから、北面と西面に比べて墳丘斜面長、特に第1段斜面が長くなる。

葺石 葺石は、第1・4・5・6トレンチにおいて確認された。葺石面の傾斜角度はそれぞれ微妙に異なっているが、第4・5トレンチは25～28度であり、これが墳丘第1段斜面の平均的な傾斜角度と考えられよう。第1トレンチはかなり緩やかであるため、本来の状態をとどめている可能性は低いと考えざるを得ない。石材は、羽曳野市教育委員会による調査で、基底石列では径20～60cmの大形の石が用いられ、その上に施された葺石は径5～10cmのものを中心とすることが判明している。本調査においては、墳丘裾部における基底石列は確認されていないが、第6トレンチでは、一部ではあるものの墳丘第2段斜面の基底部と考えられる石列が認められた。石材の大きさは、羽曳野市教育委員会の調査で確認されたものと同様といえる大きさである。また、基底部以外での葺石は雑然と積まれていることが報告されているが、この点についても、各トレンチの所見と一致する。

なお、第6トレンチではV層中に転落した石材が多く見られたが、いずれも比較的大形のものであった。墳丘第1段と第2段で使用石材の様相が異なる可能性もあるが、あくまで部分的な状況であるため、石材使用の傾向については今後の調査に俟ちたい。

まとめ

調査 今回の調査範囲内で見える限りでは、裾付近を中心にかなり広い範囲で墳丘面が削られているようである。しかも、第1段斜面全体に及んでいる可能性が高く、南面で第1段テラス面と埴輪列が確認されたものの、第3トレンチでは確認されず、部分的には第2段斜面にも改変が及んでいる。

一方で、第4～5トレンチ付近では幸うじて第1段斜面の葺石が確認され、地山の傾斜が平坦に移行する箇所も確認されたので、本飛地のおおよその構造を把握することができた。

本飛地築造に伴う遺物としては第6トレンチの埴輪列を構成する円筒埴輪がある。また、Ⅲb・Ⅲc層では、古墳時代の遺物と混在しつつ、古代を中心とする土器も多く出土した。しかし、磁器や瓦片を少量ながら含み、葺石も含めて削られた墳丘斜面に堆積したものであることから、近世以降に盛土として持ち込まれた客土に含まれた遺物という位置づけとなる。盛土の由来は墳丘周辺の土である可能性が高いと考えられるものの、仮に本飛地築造時の遺物が含まれているとしても、混入の可能性が捨てきれない。よって、これが本飛地に帰属すると確定することは難しい。当面のところ本飛地に帰属する埴輪としては、第6トレンチの埴輪列と、その他層位の確実なもの、および墳丘改変の影響を受けていないと考えられる埴頂部採集の形象埴輪などを中心として、限られた資料にとどまる。

工事 墳丘斜面の多くの部分が削られていることが判明したが、第4～5トレンチ付近は注意すべき遺構が確認された。この結果を踏まえて、遺構を避けつつ効率的に排水が可能な工法や排水経路を検討することになった。工事に伴って立会調査を実施するので、その報告において最終的な工法を示したい。(清喜裕二)

註

(1) 徳田誠志 2007「応神天皇 恵我藻伏岡陵陪冢に号外構柵設置工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』第58号、宮内庁書陵部。

(2) 伊藤聖浩・高野 学 1990「向墓山古墳」『羽曳野市内遺跡調査報告書 - 平成元年度 -』（羽曳野市埋蔵文化財調査報告書20）、羽曳野市教育委員会。

高野 学 1994「向墓山古墳」『羽曳野市史』第3巻 史料編1、羽曳野市。

(3) 註2文献のうち、伊藤・高野1990の図27を転載のうえ、一部改変（今回のトレンチ平面図を追加）した。転載にあたっては羽曳野市教育委員会からご配慮をいただいた。